気持ちと襷をつないだ駅伝大会の実践から見えたこと
～気持ちをつなぐユニバーサルデザイン～

飯島小学校　連川麟太郎

はじめに

2023年11月15日（水）に本校で初めての試みとなる『なかよし駅伝大会』が開催されました。本校児童が縦割り班ごとに分かれ、コース内で気持ちと襷をつなぎ、一生懸命走る姿には保護者だけでなく、私たち教職員も心を打たれました。これまで行っていた一般的な「持久走大会」を廃止し、1からデザインしたこの実践についてご紹介できたらと思います。

経緯

昨年度までは「ロードレース大会」という名前で取り組んでいたいわゆる持久走大会。本校だけでなく、多くの学校でも実施していたり、或いは自分が子どもの時に取り組んだりなんてこともあるかもしれませんが、どちらかというと「これまでやっていたから」「続いているから」といった理由から実施する学校も少なくないのではないでしょうか。

本校ではそういった背景もありながら、以下の点でこの行事自体の見直しを行いました。

①場所が限られ、公道にでなくてはいけない⇒子どもたちの安全性の確保ができているか？
②持久走大会の良さと子どもたちの本音⇒走るのがつらいと思っている子はいないか？
③保護者の方の協力（ボランティア）が必要⇒学校行事ではあるが、規模を縮小できないか？

上記の3点を踏まえた結果、「襷をつなぐ駅伝大会に挑戦しよう！！」ということになりました。しかし、実際は名前が決まっていただけで、競技法や詳細は一切決まっていませんでした。職員も先が見えない中で本当に1からのスタートとなる、まさに挑戦とも言える取り組みとなりました。

従来の持久走大会であると、走るのが楽しい子にとってはまさに思い出に残るものではあると思いますが、そうでない子にとっては「つらいから嫌だなあ」「お家の人にかっこ悪いところ見られちゃうなあ」。本来であれば運動は楽しいものであるべきなのに…このような気持ちになってほしくないという思いがまさに私たち教職員の願いの根幹を支えるものとなりました。このほかにも経緯はありますが、このように「なかよし駅伝大会」のねらいは「仲間と自分の気持ちを襷につなぐ駅伝」と固まっていきました。

競技方法や詳細

上記に加え、昨今では学校行事の規模の縮小化が謳われていることもあり、公道に出て行う行事性も子どもたちの安全を考え、本校と隣接する中学校の校庭をコースにしないかといった競技性の面からも1からデザインしました。幸いにも本校に今年赴任された北原亮教諭が陸上競技に精通しており、助太刀も非常に大きい中、職員全員で検討を重ね、以下のような競技法を考案したので順を追って、説明いたします。

①主体が児童であるために、児童会や6年生を中心とした行事に⇒集団意識の醸成

「なかよし旬間」の時期と偶然にも重なったこともあり、子どもたちが主体的に取り組めるような行事にするために、児童会との連携を図りました。なかよし集会という月に1度企画していた集会をこの時期には数回行い、襷わたしの練習や襷をつくる時間に充てることで練習の時間を減少させることができました。全校体育は1度だけ行い、そこでは本番の流れや座席の位置などを低学年に見本として試走してもらいました。低学年の児童が走る姿を全校で見ることで、初めての試みとなる今回の行事の全体像がなんとなくイメージできた瞬間でした。開会式や閉会式も6年生の代表委員会や運動委員会が中心となって進め、児童が前に立つ機会をみんなで大切にしました。

②縦割り班でONE　TEAM⇒みんなが楽しい異学年交流の場

持久走大会は学年毎に行っていたことで、他の学年の児童が走る姿は運動会でしかみたことがないのがほとんどでしたが、駅伝大会では全校児童が多くのがんばりを見届けることが出来るので、個人的には魅力的であると思います。走る順番にゼッケンを貼り、襷をつなぎ、走る姿はまるで箱根駅伝の選手を彷彿とさせるほどで、応援もすさまじいものでした。後述する内容にも関わってきますが、聞こえてくる声援は「がんばれ！」「〇〇さんがんばれ！」と、全校児童が座席から身を乗り出し、応援しながら自分の番を今か今かと待つ様子からこの行事をこれからも続けたいと感じました。

③勝ち負けではない！最後まで襷をつなげたか！？⇒勝敗にこだわらない価値観にするための工夫

【持久走＝嫌い】には様々な背景が考えられますが、距離が長い、疲れる、順位がつくのが嫌だなどが代表的でしょうか。駅伝ではチームスポーツの要素も強いので、それらを解消できることもあるのですが、どうしても「勝敗にこだわってほしくない」という願いもありました。そもそもなかよし班対抗の時点で体力面、人数などの条件がそろっていないところからのスタートということがあり、総合タイムで競うことが出来ない現状も踏まえ、勝敗にこだわらなくても楽しい競技性は何かを考えました。

そこで導入したのが【申告タイム制】です。本校では本番の前に2日ほど試走日を設定し、その練習のときの個人記録を持ち寄って、チームの総合タイムを算出しました。当日の記録は申告タイムとの±の誤差で勝敗を決める制度を導入しました。

この制度によって①欠席者分は総合タイムから差し引いて計算できる②練習で走った距離であれば個人の実態に合わせて参加がだれでも可能になる③責任の等分化を図ることができました。この趣旨を全校で共有したことで、チームスポーツ特有の「誰かのせいで勝った、負けた」という概念を消すことができたり、副学籍児童も気軽に参加できたりと、だれでも楽しく走る土台を築くことができたと感じています。申告タイム制については、よく分からずにがんばっている子もいましたが、当初の目的であった、楽しく襷をつなぐ駅伝大会に近づいた重要な要素となりました。

④アンカーは6年生⇒競技のウラに隠された配慮

「どうしても〇班だけ遅くなるんだよ。他の班より周回遅れとかになって、最後全校に見られながら遅いチームだけがゴールするのはちょっと見てられないよなあ。」隣の6学年主任の先生がつぶやきました。その班の6年生2人とも走るのが得意ではなく、さらに班全体の人数も他の班より一人多いのです。なかよし班は1班およそ12、3人程度で学年の人数もバラバラの編成です。さらに体力面は考慮されているわけではないので、この制度で全員つなぐことはできても、早く終わるチームとそうでないチームが生まれてしまうのです。思わぬ落とし穴でした。走順は5⇒3⇒1⇒2⇒4⇒6の学年順なので、6年生の誰かはアンカーを務めることになるのですが、〇班の彼らのためにも…そこでも意見をぶつけ合い、最終的に「早くゴールしたチームは2回目、3回目に挑戦、或いは走りたい子が続けて走り続けられるシステム」が考案されました。そうすることで最後にゴールするチームのアンカーは大勢の児童が走り続ける中でゴールできるので辛い思いをしなくてすむのではと考えました。子どもたちにも「ゴールした後、走りたい班は走っても良いよ」というと当日はお家の人にもかっこいいところを見せたいのか、喜び勇んで2回目に挑戦する子が続出しました。結局最後にゴールした6年生は危惧していた班ではなかったのですが、最後6年生の友人が一緒に約800mのコースを最後まで寄り添いながら走ってくれました。全校による温かな拍手の中、駅伝大会は終わりを迎えました。

終わりに

終始、職員、児童に支えられてばかりの行事でした。飯島小学校でのこの1つの実践が大きな襷となってこれからもどこかでつながってくれたら何よりです。まだまだ改善できるところもあり、来年度もどうなるかは分かりません。ただ、お互いのイメージを共有しながら一つの行事を生み出すのは大変でしたが、きっと得るものの方が大きいと思います。「駅伝が楽しかった」という子どもの意見がまたやりがいに変わりました。